

みのる法律事務所
第 3 1 1 号
平成 2 8 年 3 月

みのる法律事務所
弁護士 千田 實
〒 021-0853



岩手県一関市字相去 57 番地 5

TEL : 0191-23-8960

FAX : 0191-23-8950



みのる法律事務所 <http://www.minoru-law.com/> [✉ minoru@minoru-law.com](mailto:minoru@minoru-law.com)

『相客を楽しむ』



田舎弁護士が取り扱う事件は、離婚事件と相続事件が主です。男女関係の事件も少なくありません。いずれの事件も人間関係が絡む^{から}事件です。夫婦関係、親子関係、兄弟関係、男女関係は、他の人間関係より特別深い縁で結ばれている人間間の問題と言えます。それだけに、争いが生じてしまうと溝^{みぞ}が深くなり、抜き差しならない状況となってしまうことが多く見られます。それぞれに特別な思いが湧いてくるようです。

互いに相手に対し、「あの時はこうしてやった」とか、「自分はこんなにも思っていたのに」などという思い入れがあり、それが争いとなり、「あの時の恩を忘れたのか」とか、「自分の思いを裏切るのか」などと、愛情が恨^{うら}みに変わり、「かわいさ余って憎^{にく}さ百倍」ということになってしまいます。

私は、そのような事件を多く手掛け、どのような考え方をすれば、骨^{こつ}肉^{にく}相食^{あい}むようなとか、血で血を洗うとでもいうような陰湿な争いを阻止できるのかを考えてきました。最近やっとわかってきたような気がします。

そのことを、『年寄りのための童話 長生きを楽しむコツ』の第 2 0 話

黄色い本、青い本、さくら色の本、ピンクの本等、「いなべんの本」は株式会社エムジェエムの他、下記書店でも好評発売中です。

宮脇書店気仙沼本郷店 〒988-0042 気仙沼市本郷 7-8 TEL: 0226-21-4800
[amazon.co.jp](http://www.amazon.co.jp/) <http://www.amazon.co.jp/> - 1 -



として書いてみました。いずれ近いうちに発刊する予定ですが、その前にこの事務所便り『^{まとはずれ}的 外』で紹介しておいた方が、夫婦関係、親子関係、兄弟関係、男女関係の争い事を未然に防いだり、縮小することができるのではないかという思いに至りました。

そこで、今月号と来月号の2回に分けて、この事務所便りで紹介しておくことにしました。その内容は、お読みいただければおわかりいただけるはずですが、一言で言えば、夫婦関係であれ、親子関係であれ、兄弟関係であれ、男女関係であれ、はとバスの相客と同じように考えた方がよいということです。つまり、夫婦関係、親子関係、兄弟関係、男女関係は、人生という旅において大事な「道連れ」ですが、互いに「楽しみ合う」という本質においては、はとバスの相客と何ら変わらないと思うのです。そのように思えば、相手に対して過度な期待や要求をしなくて済みますし、相手に対して余計な負担を感じなくてもよいということになります。

前に、この事務所便りではほんの少しですがそんな話を述べたところ、「あの話を読んで、息子に対して過度な期待や要求をするのは間違いだったと気がつき、接し方を変えたら、息子の方も歩み寄ってきた。お陰様でした」とお礼を言われました。嬉しくなっていました。

すぐ調子に乗るのが私の欠点でもありますが、私は「一喜一憂してはならない」との教えを、「一憂はしないが、一喜は針小棒大に喜ぶ」という哲学でとらえていますので、今日もその嬉しさをこの事務所便りで爆発させたいのです。



○ はとバスの相客



家内も私も「はとバス」が好きです。特に、はとバスで東京の下町を巡るのが好きです。江戸情緒を楽しみながら、「どじょう」を食べるコースとか、「むぎとろ」を食べるコースなどは何回も楽しみました。鬼平犯科帳や長屋の大家や店子のクマサン、ハッツァンが身近になります。

東京湾内をクルーザーから眺めながら、ワインとフランス料理やイタリア料理を味わうコースも2、3度体験しました。贅沢な気分になります。高層ビルが林立し、巨大都市は昭和36(1961)年に集団就職で上京した当時とは違う東京です。

乗り合わせた方々は、どこのどなたか、それまで一面識もない方ばかりです。ですが、「相客」となったのです。はとバスに乗り合わせている間は、はとバスの遊覧と一緒に楽しむ仲間です。

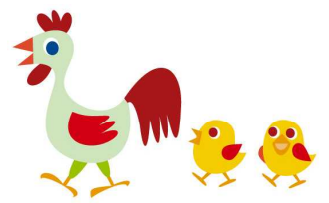
ほんの数時間だけですが、人生のひとつきを一緒に楽しむ仲間です。「袖振すり合うも多生たしょう(他生)の縁」と言いますが、これも前世ぜんせからの深い因縁いんねんによって結ばれているのでしょうか。

はとバスに乗り合わせた客は、それまでは互いに何の関係もなく、仕事上の損得うらも恨みつらみもありません。それまでは、一度も会ったことはなかった方です。その存在自体、知らなかったのです。

ですが、はとバスで出会いました。はとバスの相客となったのです。「今日1日は、はとバスを楽しむ」仲間となったのです。はとバスの相客でいる間は、はとバスを楽しむという同じ目的を持って一緒に行動するもっとも身近な仲間です。すぐそばで、「人生を楽しむ仲間」です。

数時間、はとバスを楽しむという同じ目的を持って一緒に行動するということは、何と素晴らしい縁でしょうか。それまでは一面識もなかったのですが、仲間意





識が芽生えてきます。

互いに、体を引っ込めて通路を作り合ったり、席を譲り合ったり、物を手渡し合います。短時間ですが、協力し合ってはとバスを楽しみ、バスが東京駅前に戻ったら、「さようなら」と二度と会うことはありません。あの方は、どこのどなただったのでしょか。二度とお目にかかることはないでしょう。

よく考えてみますと、夫婦も、親子も、恋人も、同級生も、同僚も、クライアントと弁護士も、はとバスの相客と同じではないかと思うことがあります。

はとバスの相客は、半日とか1日とか、わずかな時間です。夫婦や親子は、一生という長い時間となります。ですが、それは時間の長短の違いだけであって、「そばにいて、一緒に何かをする間柄」、つまり、仲間であることには違いがありません。

「夫婦も親子も、はとバスの相客と同じだ」という考え方は、臨死体験をした結果、以前にも増して確信を持ってそう思えるようになりました。夫婦だって、親子だって、この世とおさらばすれば、二度とお目にかかれないのです。一緒にいられる間は「相客」です。「人生の相客」ということになります。

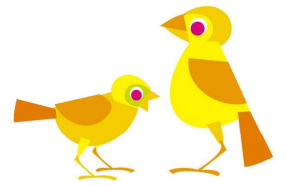
互いに支え合って、人生を楽しみ合う仲間なのです。そう考えると、夫婦関係、親子関係はもっと軽やかな関係となり、相手に余計な期待をしたり、過ぎた要求をしなくなります。それが「人生を楽しむコツ」だと確信するようになりました。

○ 道連れ

数時間一緒に、はとバスを楽しみ合うという同じ思いで乗り合わせた仲間と、夫婦、親子のように一生の間、一緒に人生を楽しみ合うという仲間は、人生と一緒に楽しむという目的において、根本的に同じだと思えるようになりました。

「旅は道連れ」という関係なのです。その道中が短いか、長いかの違いはありま





すが、旅と一緒に楽しむ「道連れ」という点では同じなのです。

「旅は道連れ」という言葉の意味は、江戸時代のように旅に危険が伴う時代には、道連れがいれば「安心して」旅ができるという意味だったようですが、旅が危険ではなくなった現代では、道連れがいれば「楽しく」旅ができるという意味に変わったという話を読んだことがあります。

はとバスの客仲間という関係も、夫婦、親子という関係も、「道連れ」です。楽しく旅をする「道連れ」なのです。人生が楽しくなるかどうかは、この「道連れ」となる仲間次第ということになります。

「道連れ」とは、旅などで一緒に行くこと、また、つれだって一緒に行く人ですが、その代表が江戸時代の戯作者・十返舎一九(1765-1831)の『東海道中膝栗毛』の弥次さん・喜多さんでしょう。

この本は18冊発刊されたそうですが、最初の書名は『浮世道中膝栗毛』だったそうです。「浮世」とはこの世、「道中」とは旅、「膝栗毛」とは歩いて旅をすることです。「膝栗毛」は膝、つまり、足が栗毛の馬の代わりということで、「歩く」ということのようにです。

ですから、最初の書名ですと、一九は人生と旅を結びつけていたように受け取れます。「人生は旅のようなものだ」という思いだったのではないのでしょうか。

そして、旅は一緒に歩く仲間次第ということだったのでしょう。旅も人生も、相客に恵まれたいものです。相客を大事にし、人生を楽しみ合いたいものです。

同じ江戸時代の俳人・松尾芭蕉(1644~1694)も、『おくのほそ道』(1702年)で「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人なり」と書いています。「百代」とは永遠、「過客」とは訪ねてくる人、行きすぎる人、つまり、「たびびと」ということのようにです。



「月日というのは、永遠に旅を続ける旅人のようなものであり、来ては去り、去っては来る年もまた同じように旅人である」という意味のようです。このように、人生を旅ととらえる考え方は古くからあったのです。

蛇足ですが、一九は『東海道中膝栗毛』によって当代切っの流行作家となり、原稿料だけで生活を維持できた最初の職業作家と言われているそうです。真偽のほどはわかりませんが…。

それが本当だったら羨ましい限りです。私は皆様のご支援を得て、辛うじてこんな駄文だぶんを書いています。迷惑うらやをかけているという思いで気になって仕方ありません。「金を払っても読みたい」と思われるような本を書きたいものです。

○ 楽しみ合うのみ

はとバスの相客に対し、難しいことを言う人などいません。夫婦であれ、親子であれ、はとバスの相客と同じです。互いに、「人生を楽しみ尽くす」という同じ目的に向かって歩むだけです。ともに人生を楽しみ合うだけです。

「親だから、子に対し、こうしなければならない」とか、「子だから、親に対し、こうしなければならない」などと、あまり深く考える必要はないのです。夫と妻の関係も同じです。理想像いかを掲げ、それを相手に求めるべきではありません。干渉しすぎてはならないのです。

あの世には、夫婦も親子もありませんでした。可愛い盛りの孫もいませんでした。夫婦も親子も、ジッチも孫もいませんでした。夫婦も親子も、この世にいる間だけの間柄なのです。この世という、はとバスの相客に過ぎないのです。

私の臨死体験では、あの世には時間も空間も主客しゅかくもなかったという印象が残っています。夫婦も親子も、この世というはとバスで旅をしている間だけの関係なの



です。旅を楽しみ合えばそれで十分であり、それ以上のものはないのです。

夫婦も親子も、この世における人生という旅の相客なのです。人生という旅の「道連れ」として楽しみ合うだけです。相手に多くを期待し、過度な要求をする関係ではないのです。

こう考えれば、夫婦関係も親子関係も重苦しいものとはなりません。互いに、縛しばったり縛られたりする必要はなくなります。軽やかな関係でいいのです。互いに、相手に対する責任など取らなくてもいいのです。

「命てんでんこ」です。「人生てんでんこ」です。代わって死ぬことも、代わって生きることができないのです。責任など、取れるはずがないのです。どんなに可愛い孫でも、代わって食べてはできません。代わっておしっこはしてできません。

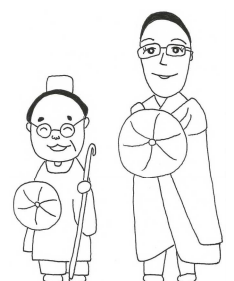
ただやれるのは、一緒に楽しみ合うことだけです。「命てんでんこ」ですが、人生という旅を「道連れ」として楽しみ合うことはできます。

はとバスの相客も人生の相客も、相手の責任まで取る必要はないし、取れないのです。それが「命てんでんこ」ということであり、裏を返せばそれが「個人の尊厳」なのです。

相客は、ただ優しい関係でいいのです。互いに、「相手の役に立ちたい」、「相手が楽しい旅ができるよう、楽しい人生を送れるよう、支えてやりたい」と思うだけでいいのです。

はとバスに乗り合わせた客同士の如く、相手に対し、通路を確保してやり、席を譲るべき場合には席を譲り、物を手渡す時は手渡してやればいいのです。

夫婦関係でも親子関係でも、相手が手を借りたいという場面では手を貸してやればいいのです。借りたい時は借りればいいのです。互いに、はとバスの相客のように、人生という旅を相客として楽しみ合うのみです。





《 新刊のご案内 》 年寄りのための童話 『長生きを楽しむコツ その十一』

新刊『長生きを楽しむコツ その十一』が3月25日に発刊の運びとなりました。第17話「待つを楽しむ」は、平成27（2015）年1月1日に書いたものです。第18話「他力を楽しむ」は、平成28（2016）年1月1日に書いたものです。

第17話は、東京都新宿区歌舞伎町の大久保病院のベッドの上で書きました。第18話は、自宅台所の食卓で書きました。ここ10年くらいは入退院を繰り返して、病院慣れして病室も苦にならなくなりましたが、やはり自宅がいいです。普段はあまり感じませんが、「普通ありがたい」という実感が湧いています。

平成27年の丸1年は短く感じました。年々、1年間が短く感じます。1歳の1年は1/1ですが、73歳になりますと1/73ですから、「100%」と「1.369%」という違いで、1年の重みが雲泥の差となります。

それでも、平成27年は私にとって充実した365日となりました。自分の努力で充実したというより、他人の力で充実した1年でした。いつの年も同じなのでしょうが、平成27年はそれが格別身に染みた1年でした。

平成27年1月1日には「この1年をどう生きたらよいか」と考えていましたが、平成28年1月1日は、「平成27年1年間は、他人の力で素晴らしい1年になった」ということに対する感謝の気持ちで一杯でした。平成28年は、「自分はこのように生きよう」とか、「自分はこのように努力しよう」とか、自力本願はあまり頭に浮かびませんでした。他人の力によって生かされていることに対する感謝の気持ちだけでした。まさに「要介護者」になったという思いです。

「要介護者」とは、病気や老齢のため体が不自由となり、他人の介護が必要な人ですが、体が不自由でなくても、他人の力が必要であるという意味では誰もが「要介護者」です。

私は、妻から腎臓をもらい、一級身体障害者の認定を受けています。身体的にはほとんど自分のことは自分でできるようになっていますが、精神的には「要介護者」です。身の回りの多くの人に介護してもらっていますし、これからも介護してもらわなければやっていけません。「長生きを楽しむコツ」は、「要介護者」となって他人に介護をしてもらうのが一番です。他人に介護をしてもらい、それに対して感謝し、どこかで恩返しをしようと頑張ることが人生を充実させ、楽しむことができることを実感しました。

この『長生きを楽しむコツ その十一』の第17話「待つを楽しむ」と第18話「他力を楽しむ」から、そのような思いが伝わったなら望外の喜びです。お目を通していただき、ご感想を拝聴できれば幸いです。